

## 校長先生の部屋だより

### 哲学ルームだより



この「哲学ルーム」は、生徒、先生の区別なく、共に学校スローガンである「人間を学ぶ」空間です。

今日は1年生の男子が2人哲学ルームを尋ねてきました。

—この間は世界とは何かを考えたね。今日も考えて見よう。世界には「客観的な世界」と「自分の世界」をとりあえず分けて考えることができると思うけど、今日は「自分の世界」について考えて見よう。例えば、君がグーグー寝ているとする。突然目が覚めた。まず頭の中でどんな作業をする？

A：状況を確認すると思います。

—うん。ここはどこ？ということだね。この「ここ」が「世界」というわけだ。「ここ」が家の中だったら？

B：また寝ます。

—じゃあ、教室だったら？

B：もう寝ません。



—状況によってすることが変わるといことだね。私も下関から JR で通っているんだけど、行きも帰りも風景は緑ばかりであり変わらない。だから突然起きるととてもあせるんだ。行きの電車が帰りの電車が分からない。だって行きの電車と帰りの電車ではすべきことが違うでしょ。行きの電車ならいろんな準備をしなければならないけど、帰りは好きなことをしていい。だから必死になって手がかりを探す。分からないととても不安なんだ。そこでこうまとめてみよう。人間は目覚めているときに家、教室、行きの電車といった世界の中にいて、その世界の中で自分が何者かが分かっている。例えば家の中では家族の一員、教室の中では生徒、行きの電車の中では仕事に向かう乗客、といった具合だ。自分が何者か分かれば、何していいかも分かる。そうすると B 君はその都度の世界でその世界での役割を演じていることになる。道を歩くときにも「通行人」という役割を演じているし、親の前では「子」を演じている、というわけだ。

A：でも、何かに没頭しているときとか、眠っているときには役割を演じている、という意識はないと思います。

—たしかにそうだね。じゃあ、こういう何も考えていないときには世界はない、自分はどこにもいない、ということになるのだろうか。B 君はどこに行っちゃったんだろう。それとも何かに没頭しているときも、眠っているときも実は何かの役割を演じているんだけど、それに気付いていない、ということだろうか。例えば教室で寝ていても目覚めたら、「あ、僕は生徒だったんだ」というように。そうすると B 君は常に役割を演じていることになる。そこで「B 君は役割だ」と言っていだろうか。つまり B 君は生徒であったり、子であったり、通行人であって、それ以外に B 君自体、B 君そのものはいない、ということだ。こう考えてもいい？

A：違うと思います。デカルトが「我思う、故に我有り」と言ったように、自分は考えることによってたしかに存在すると思います。

—デカルトかあ。残念だけれど、時間切れ。また来て下さい。